

星湖李瀼の学問的背景（1）

—家系と生涯と著述—

金 光 来

はじめに

朝鮮王朝後期を代表する思想家として名高い星湖李瀼（1681～1763、字は子新、星湖は号。以下、星湖と略す）は、今日の朝鮮思想史研究において主につぎの三つの方面から論じられることが多い。すなわち、

第一、実学者としての星湖である。庚申換局（1680）による南人政権の没落と父李夏鎮（1628～1682）の失脚に伴い、一生野にあって半農半学の生活を余儀なくされた星湖は、当時の現実社会が抱える様々な問題を目の当たりにし、その原因を追究して、教育・法律・財政・国防・科挙・官僚・貨幣・土地など、諸分野にわたってその改革案を提示した。

第二、性理学者としての星湖である。星湖は上記の制度改革論者としてのイメージとは異なり、強烈な道統意識のもと、朱子経解にもとづく精緻な経書研究を始め、退溪李滉（1501～1570）の流れを汲む近畿南人の一員として、退溪関連の著述も数多く残した。とりわけ星湖は、退溪が「四端七情論辨」の中で唱えた理氣互発説の正当性を証明するために、独創性に富む新たな四端七情論を創案している。

第三、西学研究の先駆者としての星湖である。イエズス会宣教師らによる漢訳西学書は16世紀末以降、中国を介して朝鮮にも伝来するが、西学受容初期の西学一般に対する研究は、単なる好奇心による断片的な紹介にすぎなかった。朝鮮王朝における西学研究が本格的なレベルに達したのは、星湖の積極的な評価と研究を経てからのことである。星湖の膨大な量の著述の中で論及されている漢訳西学書は、その分野が天文・暦算・地理・科学・宗教・倫理など多方面にわたっており、当時の文人の中では群を抜いている。

そもそも儒学の目的は、修己（個人）と治人（社会）の両方面における真知の獲得とその実践にある。星湖本人が奉じていた朱子学でいえば、性理学と経世学がそれである。すなわち、星湖の学問的成果の中で、第一の制度改革案の提示は治人の学（我対社会・経世致用）にあたり、第二の新四端七情論の案出は修己の学（我対我・自己修養）にあたる。両者は基本的に経書（おおむね性理学は四書に、経世学は六経にもとづくといえる）がその立論の根拠となっており、この星湖学の両分野が経書に対する立場、つまり経学観において密接な関係を持っていることは多言を要しない。それでは、第三の星湖学における西学研究の位置づけの問題であるが、その時代におけるまったく新しい外来の新学術に対して、星湖本人は何をどのように理解しており、それが星湖学の第一・二の両方面にいかなる影響を及ぼしているのかが焦点になるであろう。以上のように、一見するだけでも星湖の研究は、現実批判的な経世論、至極伝統的な性理学説、異質の西学と多岐にわたり、その思想の筋をつかみにくい学者であるということが窺える。

今日の朝鮮思想史研究の中の星湖は、朝鮮朝後期の思想から近代的思惟の萌芽を見つけようとする実学研究者によって改革的な性格の経世論が注目され、いわゆる「朝鮮実学」における

「経世致用学派」の大宗として評価・規定されるようになり¹、またその性理学思想からも実学の哲学的な基盤を見出そうとする様々な試みがなされてきた²。だが、最近では研究テーマの細分化など、星湖学全般に対する研究が深化するにつれ、星湖の経学や性理学はむしろ朱子や退溪の立場を継承する伝統的な側面が強い³という反論に加え、星湖の経世論ですら、決して朱子学的な思惟から食み出るものではないという見解が提示されている⁴。さらに、退溪の理気互発説を証明するために創出された「主理的」な星湖の新四端七情論からは、西学の靈魂論の影響が強く見られるという研究まで出ているなど⁵、星湖の学問思想に対する見方は未だに定まっていらない。

ただし、今までの諸研究から明らかなのは、星湖の学問は儒学の両方面である修己と治人を総合的に扱う均衡の取れた学問であり、その中には、伝統と近代という言葉では正確に言い表すことができないものの、確かに伝統的な思考と斬新で自由な発想がそれぞれ無視しえない比重をもって同時に存在している点であろう。興味深いのは、このような星湖学の特徴はすでに星湖の生前から弟子門人によって認識されており、星湖の死後、星湖学の持つ伝統の尊重と自得の強調という両要素のうちどちらを重視すべきかという立場の差によって、学派の分裂が起きたことである⁶。

本稿執筆の目的は、修己と治人の両方面を包括し、伝統的な思考と斬新で自由な発想が共存する星湖学の特徴に注目し、そうした特徴の淵源、すなわち学問的背景を探る準備作業として、まず星湖の家系と生涯、そして学問的成果の特徴的な面を確かめることである。

1 星湖小伝

1.1 家系

星湖李滉（1681：肅宗7～1763：英祖39）、字は子新、星湖は号である。京畿道広州の瞻星に住んでいたため、自ら星湖⁷と号した。本貫は驪州である。学統もしくは党色は、自ら退溪李滉の流れを汲む南人の一派、近畿南人をもって自任した。驪州李氏家門は、高麗朝中期に仁勇校尉を務めた李仁徳を始祖とし、代々郷吏の戸長層として下級管理職や武官職を受け継いできたが、星湖の8世祖、李継孫が始めて「文学を以て家を起し」て以来、大いに繁栄を遂げ

¹ 韓祐勳『李朝後期の社会と思想』、乙酉文化社、1960；韓祐勳『星湖李滉研究』、서울大学校出版部、1980；李佑成「実学研究序説」、『実学研究入門』、一潮閣、1973など。

² 尹絲淳「近代（朝鮮末期）儒学研究—性理学実学区分点—」、『東洋学』12、1982など。

³ 李楠永「星湖李滉の退溪観と彼の実学論」、『退溪学報』36、1982；李光虎「星湖李滉の思想—『孟子疾書』を中心に—」、『泰東古典研究』2、1986が先駆的な研究である。

⁴ 元在麟「星湖学関連資料の検討」、『星湖学報』1、2005、38頁

⁵ 主要な研究に、川原秀城「星湖心学—朝鮮王朝の四端七情理気の辨とアリストテレスの心論」、『日本中国学会報』56、2004；安泳翔「東西文化の融合衝突過程に現れた星湖学派の哲学的特徴の一断面—人体観に見える pneuma と心気論を中心に」、『民族文化研究』41、2004がある。

⁶ 安泳翔「星湖学派の性理学と脱性理学の葛藤」、『韓国儒学思想大系Ⅲ：哲学思想編（下）』、韓国国学振興院、2005；柳鐸一『星湖学派の文集刊行研究』、釜山大学校出版部、2000；申恒秀「李滉の文集刊行とその性格」、『韓神人文科学研究』3、2002などを参照。

⁷ 星湖本人の記録に「余自十數年來、築于星湖之濱、先隴實在焉」とあり、居処の近くに「星湖」という名の湖があったことが窺える（『星湖全集』巻53・悪鳥小窩記）。

た⁸。

李繼孫（1423：世宗5～1484：成宗15）は、1447年（世宗29）、式年文科に及第して校書館校勘に補任されて以降⁹、1455年（世祖1）には兵曹佐郎をもって原従功臣二等に録され¹⁰、その後は江原・永安・黄海・京畿の4道の觀察使や、刑曹判書・漢城府尹・大司憲・兵曹判書など、様々な要職を歴任した。世宗朝から成宗朝に至る六朝に歴事して名を史牒に残したという¹¹。また、明への使行経験があり¹²、日本や琉球との外交にも携わっていたことが『世祖実録』を通じて確認される。特に李繼孫は、1470年（成宗1）永安道觀察使兼永興府使在任時に郷学制度の整備に尽力し、北路（永安道、のちに咸鏡道）の儒風を振作した功績を称えられ、のちに文会書院（咸興）・興賢書院（永興）・玉洞書院（安辺）に配享された¹³。李繼孫のこうした功労は模範先例として認められ、1480年（成宗11）、他の諸道の郷校に学田が賜給されるきっかけとなった¹⁴。星湖はこのことについて、李繼孫が「弓刀之俗」の北路を「衣冠之郷」に一変させたとし¹⁵、北路に李繼孫があることは、まるで「東国に太師（箕子）があり」、「中華に唐虞（堯舜）がある」ことのものであるとして非常に誇りに思っていた¹⁶。なお、李繼孫自身が原従功臣録に載っていることや、当代の有力家門（鄭麟趾・李仁孫・韓明澮）との通婚関係からして、当時の李繼孫一門は、世祖功臣系列の勲旧派として栄達を遂げていたことが窺える¹⁷。

驪州李氏家門が勲旧派の色彩から脱し、士林の列に合流し始めたのは、李繼孫の曾孫である李士弼代からであった。李士弼（1503：燕山君9～1556：明宗11）は1538年（中宗33）、別試文科に合格し、主に文翰職の藝文館検閲・承政院注書・成均館典籍などを経て、侍講院司書として東宮（のちの仁宗）の輔養官を数年間務めた。弘文録に選ばれたことがあるほど、文翰が出色で経世にも造詣が深かった李士弼は、士林系の名士らと広く交友し、宋麟寿（1499～1547）や南応雲（1509～1584）からはその行宜を認められた¹⁸。さらに、李士弼の甥の李友直（1529～1590）が李珥（1536～1584）や鄭道遠（1559～1597）など士林の重鎮から信望を得る

⁸ 李成茂「星湖李瀾の生涯と思想」、『朝鮮時代史学報』3、1997、101頁；『星湖全集』巻53・丙谷祠堂記「我李自高麗仁勇校尉、九傳至敬憲公。其間固有爵命、然皆栖栖下位、及敬憲公而大顯」；『星湖全集』附録巻1・家狀（李秉休撰）「本驪州人也。八世祖諱繼孫、以文學起家。仕至兵曹判書、贈左參贊諡敬憲」

⁹ 『成宗実録』巻170・成宗15年9月15日乙亥条「繼孫、字引之、驪州人。正統丁卯、中生員試、擢文科、補校書館校勘」

¹⁰ 『世祖実録』巻2・世祖1年12月27日戊辰条

¹¹ 『成宗実録』巻170・成宗15年9月15日乙亥条；『星湖全集』巻58・大司憲李公神道碑銘「及聖朝有兵曹判書諱繼孫……歴事六朝、名垂史牒」

¹² 『成宗実録』巻170・成宗15年9月15日乙亥条

¹³ 『成宗実録』巻6・成宗1年6月15日壬戌条；『星湖全集』巻58・大司憲李公神道碑銘；『星湖全集』巻56・文会書院故事録跋「時則我先祖敬憲公受命按節、首闡休明之化、設庠序頒典籍、優以養之、掖以導之、不啻若慈母之食其病兒。……當時北民之俎豆享祀、遠邇同然、或毀于兵亂、在今修典不廢者、在咸興曰文會書院、在永興曰興賢書院、在安邊曰玉洞書院、余所聞止此也」

¹⁴ 『成宗実録』巻116・成宗11年4月16日丙寅条

¹⁵ 『星湖全集』巻51・序・送李通判來慶赴任鏡城序「我先祖敬憲公以文化、一變弓刀之俗、爲衣冠之郷」

¹⁶ 『星湖全集』巻56・題跋・文会書院故事録跋「北路之有敬憲公、猶夫東國之有太師、中華之有唐虞」

¹⁷ 李成茂「星湖李瀾の生涯と思想」、『朝鮮時代史学報』3、1997、101頁

¹⁸ 김학수「星湖李瀾の学問淵源—家學の淵源と師友關係を中心に—」、『星湖學報』1、2005、60頁

ことになるや驪州李氏家門の家格も大きく伸長した¹⁹。なお、李士弼と李友直にも明への使行経験がある（李士弼は1548年の千秋使、李友直は1585年の謝恩使）。

だが、驪州李氏家門を名実ともに文閥家門の地位に引き上げたのは、李継孫の5世孫で、星湖の曾祖にあたる李尚毅というべきであろう²⁰。李尚毅（1560：明宗15～1624：仁祖2）は、1586年（宣祖19）別試文科に合格して承文院権知正字に補任されて以来、司憲府持平・兵曹正郎・司諫院司諫・弘文館直提学・吏曹参判・司諫院大司諫・成均館大司成・刑曹判書・吏曹判書・司憲府大司憲・議政府左賛成など、要職をあまねく歴任した。1597年（宣祖30）には陳慰使の書状官として、1611年（光海君3）には東宮誥命冕服奏請使として明に使行している²¹。李尚毅は光海君の即位（1608）に伴い登場した北人政権の中心人物であり、1612年（光海君4）には、壬辰倭乱（1592～1598）当時光海君に扈從した功が認められ衛聖功臣三等に録される²²など、当時驪州李氏家門は繁栄を極めていた。星湖の記録によれば、驪州李氏家門は1590年（宣祖23）から1611年（光海君3）までの22年間に、文科及び重試合格者11人、武科合格者4人、生員・進士試合格者18人、合計33人の科挙合格者を輩出しており²³、特に李尚毅は七男四女を儲けたが、息子のうち4人と、すべての女婿が登第し顯達した²⁴。その後、仁祖反正によって北人政権が崩壊し、廢母庭請に参与した李尚毅も官爵を削奪されるが²⁵、党色に囚われない人事など平素の円満な処世が幸いしてその禍が子・孫には及ばなかった²⁶。

李尚毅家門は当時、海平尹氏・延安李氏・全義李氏・東萊鄭氏・南陽洪氏・綾城具氏・金海金氏・龍仁李氏など西人の名門のみならず、広州李氏・韓山李氏・豊川任氏・幸州奇氏・宜寧南氏など北人家門や、陽川許氏・泗川陸氏・安東権氏・文化柳氏・同福呉氏・平康蔡氏・晋州柳氏・晋州姜氏など南人家門とも通婚していた。朝鮮朝中期の段階ではまだ党色の分裂がさほど甚だしくなかった証拠といえることができる。しかし、時代が下るにつれ、驪州李氏家門の通婚圏も次第に狭くなるが、これは党内婚が一般化する朝鮮朝後期の慣行と軌を一にすることである²⁷。

李尚毅の息子4人（李志完・李志宏・李志定・李志安）は文科に及第し、宣祖朝から仁祖朝にかけて政界で活躍した。

李尚毅の長子の李志完（1575：宣祖8～1617：光海君9）は、1597年（宣祖30）庭試文科に合格し、司諫院正言・司憲府持平・弘文館修撰などを経て、1607年（宣祖40）には侍講院弼善として王世子に經史を講義した。光海君朝に入っては戸曹参議・承政院右承旨・議政府右参贊・刑曹判書などを歴任した。李志完の経歴では、1608年（宣祖41）宣慰倭使となり、翌年日本の

¹⁹ 김학수 「星湖李瀾の学問淵源一家学の淵源と師友關係を中心に一」、『星湖學報』 1、2005、60～61頁

²⁰ 李継孫から李尚毅までの世系は、李継孫（兵曹判書）→李之時（県監）→李公礪（啓功郎）→李士弼（応教）→李友仁（僉正）→李尚毅（賛成）とつながっている（『星湖全集』巻68・從兄素隱先生家伝）。

²¹ 『少陵集』年譜；『少陵集』巻4附録・高祖考家狀（李震休撰）

²² 『少陵集』年譜「四十年壬子、公五十三歳……十一月、以壬辰春坊時陪扈功、録衛聖功臣三等、封驪興君」；『少陵集』巻4附録・高祖考家狀（李震休撰）「冬以壬辰衛聖功、録三等、進階崇祿、封驪興君」

²³ 『星湖全集』巻53・登科記「自庚寅至辛亥二十二年之間、文武大小榜節次著名、其文科及重試合十一、進士及生員合十八、武科四、合三十三人」

²⁴ 『星湖全集』巻56・先祖少陵公簡帖跋「維我曾王考貳相公有七子四女、四子暨四女壻皆登第顯仕」

²⁵ 『仁祖実録』巻4・仁祖2年2月15日己亥条

²⁶ 김학수 「星湖李瀾の学問淵源一家学の淵源と師友關係を中心に一」、『星湖學報』 1、2005、63頁

²⁷ 李成茂 「星湖李瀾の生涯と思想」、『朝鮮時代史學報』 3、1997、111頁

使臣（平景直・玄蘇）を応対したとの記録が目を引く²⁸。なお、明への使行記録も2回確認される²⁹。このように驪州李氏家門が外国とかかわる職務に代々携わっていたことは星湖の西学研究や博学的な研究態度と関連して注目に値する。

李尚毅の四子の李志定（1588：宣祖21～1650：孝宗1）は、1616年（光海君8）別試文科に合格し、戸曹佐郎・礼曹正郎・正言・献納などを歴任したことが『光海君日記』から確認できる。黄耆老（1521～？）に書法を学び、草書と隸書をよくしたことが知られる。新羅の金生（711～？）から朝鮮朝17世紀以前までの名筆51人の字を木刻、拓本を取って作った法帖『大東書法』を編纂したともいわれ、これは朝鮮書道史における貴重な資料である³⁰。

李尚毅の七子の李志安は、星湖の祖父である。李志安（1601：宣祖34～1657：孝宗8）は、1633年（仁祖11）に進士となり、金井道察訪・工曹佐郎などを務め、1651年（孝宗2）別試文科に合格して以降は、礼曹佐郎・司憲府持平・司諫府正言・成川府使などを歴任した。『大学』と『中庸』を始めとして経・史に詳しく、文詞は典雅、詩文をよくした³¹。

李尚毅の孫3人も文科に合格し、文閥家門としての伝統をつないだ。中でも特に興味深い人物は、李志安の子で星湖の従祖叔父にあたる李元鎮である。李元鎮（1594：宣祖27～1665：顯宗6）は、1630年（仁祖8）別試文科に合格し、司諫院正言・平安道都事・司憲府持平・弘文館修撰などを経て、1647年（仁祖25）、右承旨となった。1640年（仁祖18）には東宮弼善として瀋陽で人質になっていた昭顯世子に仕えた³²。特に李元鎮は、1653年（孝宗4）、オランダ人のヘンドリック・ハメル（Hendrick Hamel, 1630～1692）一行が済州島に漂着した際の済州牧使であり、政事に供するために済州の地理を調べ、風謡を採集して『耽羅志』を編纂したことでも有名である³³。なお、李元鎮は『磻溪随録』で有名な柳馨遠（1622：光海君14～1673：顯宗14）の外叔であり、幼少期の柳馨遠の教育を担当していた³⁴。李元鎮の学問は、経伝子史はもちろん、声律・陰陽・兵陣・卜筮・星経・地理・書射・計数の類にも詳しく知られ³⁵、星湖によれば柳馨遠の学問は李元鎮の博学的学風に源を発するという³⁶。

東西間の政争の中でも代々にわたって繁栄していた驪州李氏家門が凋落の一途を辿り始めたのは、肅宗（在位1674～1720）朝に入ってから本格化した党争の煽りを受けてからのことである。その激烈を極める党争の渦中にあった人物が、李志安の長子で星湖の父の李夏鎮である。

李夏鎮（1628：仁祖6～1682：肅宗8）は、肅宗朝初期の南人政権に参加し、許積（1610～1680）・許穆（1595～1682）・尹鐫（1617～1680）・権大運（1612～1699）・権愈（1633～

²⁸『星湖全集』巻67・従祖考斗峯公行録「戊申（1608）……冬受宣慰倭使之命、壬辰兵燹之後、倭始來乞和也。又明年己酉春、倭使平景直暨玄蘇等至、公令先習祇迎宣醞儀於門外」

²⁹『星湖全集』巻67・従祖考斗峯公行録「癸卯（1603）差書狀官赴燕還」「（壬子：1612）冬差奏請副使赴燕、明年春復命、陞資憲階」

³⁰ 우응준 「聽蟬詩稿解題」、『近畿実学淵源諸賢集』一、大東文化研究院、2002

³¹『星湖全集』巻67・祖考司憲府持平贈吏曹参判府君行状

³²『星湖全集』巻67・従祖叔父太湖公行録「庚辰移東宮弼善、時昭顯世子質留瀋館、公承命往從」

³³『星湖全集』巻67・従祖叔父太湖公行録「濟古耽羅國、在南海中七百里。風俗殊別、民卒悍獠、號稱難治。公不以左屈爲嫌、撫御有法。又察其地理、採其風謡、纂成耽羅志、爲出治之資、至今刊行于世」

³⁴『星湖全集』巻68・磻溪柳先生伝「其舅李監司元鎮、世所稱太湖先生者也。博學多聞、先生從而受業」

³⁵『星湖全集』巻67・従祖叔父太湖公行録「經傳子史、無不旁通午貫、凡聲律陰陽兵陣卜筮星經地理書射計數之類」

³⁶『星湖全集』巻68・磻溪柳先生伝「先生之學、源於太湖。太湖授之以博、先生濟之以世務。據始要終、協義而協」

1704)・呉挺昌(1634～1680)らとともに政界を主導した人物である。李夏鎮は1666年(顯宗7)式年文科に合格して以来、成均館典籍・礼曹佐郎・兵曹佐郎・司憲府持平・侍講院弼善・工曹参議・大司成・都承旨・大司憲などを歴任した。1678年には清へ使行している³⁷。

政界の情勢は、1674年(顯宗15)の甲寅礼訟の勝利によって南人が政権を掌握したが、早くも南人は政治的未熟さを露呈していた。兵車の製造や五家統法・紙牌法の実施、そして都体府の設立など、尹鑄の急進的な主張によって南人内部に不和が生じ始め、ついに徳源に配流中であった西人の宋時烈の処分をめぐる対立が表面化し、宋時烈に寛容的な濁南(許積・権大運)と厳しい処罰を主張する清南(許穆・尹鑄)に分裂した。結果、先王の遺臣として南人に信頼を寄せていた肅宗の心も次第に離反し始めた。その後、清濁の区別も曖昧になり、許穆が許積の専横を非難する疏を上げれば、尹鑄がまた許穆の非を指摘するなど、朝臣の間には連日誹謗中傷が繰り返され³⁸。政情が混乱を極める中、李夏鎮は相臣の先王廟庭への追配や城・墩臺の築造など肅宗の政治的判断に対して苦言を呈し、また尹鑄の朝廷への召還を強く求める内容の疏を上げ、それが「党論を暗に擁護し、朝廷の臣下を凌蔑する意図がある」として肅宗の怒りを買い、晋州牧使に左遷された³⁹。

まもなく政情は急変することとなった。南人政権に見切りをつけようと思っていた肅宗は、まず兵権を西人に渡し、直後に起きた「三福の変」を機に南人を除去した。三福とは仁祖の孫であり、麟平大君の息子3人の福昌君・福善君・福平君をいうが、許積の庶子の許堅が三福と結託し、逆謀を企てているとの告発が寄せられたのである⁴⁰。事件は即刻処理され、首謀者の福善君と許堅は死刑に処され⁴¹、福昌君も賜死し⁴²、福平君は配流された⁴³。なお、刑罰はそれに止まらず、首謀者の父としての責任を問われた許積が賜死し⁴⁴、逆謀と直接的な関係がなかった尹鑄も、体察府を復設して兵権を独占しようとしたという罪名で賜死した⁴⁵(庚申換局)。南人は三福の変が起きてから三か月足らずにして、主要人物がほとんど除去される甚大な打撃を被ったのである。この煽りを受け李夏鎮も一旦その年(1680)の5月に晋州牧使を罷職されるが⁴⁶、9月になって再び「教文を撰改した」という嫌疑で「極辺遠竄」の議論が起こり⁴⁷、ついに10月には平安道雲山郡に竄逐された⁴⁸。李夏鎮は謫所の雲山で1682年(肅宗8)6月14日他

³⁷ 『星湖全集』巻67・先考司憲府大司憲府君行状「三月始辭朝赴燕。至平壤聞燕有喪、朝廷召王孫福平君榼還、假公上卿、銜爲進香正使、別差副价、追及于道」

³⁸ 韓祐勸『星湖李瀾研究』、ソウル大学校出版部、1980、6～8頁

³⁹ 『肅宗実録』巻9・肅宗6年(1680)2月25日乙酉条

⁴⁰ 『肅宗実録』巻9・肅宗6年(1680)4月5日甲子条

⁴¹ 『肅宗実録』巻9・肅宗6年(1680)4月12日辛未条「罪人許堅凌遲處死於軍器寺前路、桤處絞」

⁴² 『肅宗実録』巻9・肅宗6年(1680)4月26日乙酉条「是日賜楨死、罷鞫廳」

⁴³ 『肅宗実録』巻9・肅宗6年(1680)4月26日乙酉条「引見鞫廳諸臣、命禪定配遠地。金壽恒請圍籬、從之」

⁴⁴ 『肅宗実録』巻9・肅宗6年(1680)5月5日癸巳条「憲府連前啓、答曰、許積賜死」；5月11日己亥条「禁府啓曰、罪人許積賜死命下矣。即遣都事、賜死之意敢啓。傳曰、知道」

⁴⁵ 『肅宗実録』巻9・肅宗6年(1680)5月15日癸卯条「(柳)尙運曰……先以此兩件事及復設體府、圖占兵權事、鞫問似可」；5月20日戊申条「尹鑄賜死命下、以臺啓請更鞫、不得舉行。至是臺啓始停、遂賜死」

⁴⁶ 『肅宗実録』巻9・肅宗6年(1680)5月11日己亥条

⁴⁷ 『肅宗実録』巻9・肅宗6年(1680)9月4日己未条

⁴⁸ 『肅宗実録』巻9・肅宗6年(1680)10月2日丁亥条

界した⁴⁹。

星湖は父が他界する前年の1681年（肅宗7）10月18日に、その雲山で李夏鎮の五子として生まれた⁵⁰。まさに星湖の一生は誕生そのものから党争の暗い影を背負っていたのである。

1.2 生涯

李夏鎮の死後、星湖一家は先塋のある京畿道広州の瞻星里に戻った。星湖は結局この瞻星里で自身の80年に及ぶ生涯を送ることになる。

星湖は生まれながらに「清羸多疾」で、母の権太夫人はつねに薬囊を身佩して薬を飲ませるほどであったため、師に就いて学を受けることができなかった⁵¹。受学が遅れていた状況は、星湖本人の述懐を通して確認することができる。星湖は従姉（李殷鎮の娘）の息子金履萬（1683：肅宗9～1758：英祖34）のために撰した墓碑銘の中でつぎのようにいっている。

（金履萬は）幼い頃から優れた才能を持ち、8歳ですでに五言詩をよく作った。わたしがいくつか歳は上であったが、未だ書を読むことができなかったため、公に会うたびにいつも恥ずかしい思いをした⁵²。

星湖は10歳を過ぎてようやく本格的に学を受けることになるが、その訓導にあたったのはすなわち仲兄の李潜（1660：顯宗～1706：肅宗、号は剡溪）であった。入門は遅かったが、星湖は「穎悟絶人」の資質に「独黙坐手卷、終日不輟」の努力が加わり、群書を博覧し、前言往行を強記するうえに、詩文もよく作り、周りの人々を驚かせるものが多かったという⁵³。こうした日々の努力が実を結び、星湖は25歳（1705：肅宗31）の時、増広科の初試に策問をもって入格するが、試所での録名が規式に合わなかったため、会試に進むことができなかった⁵⁴。

翌年の1706年（肅宗32）9月、星湖一門には再び殃禍が降りかかった。仲兄の李潜が、王世子（張禧嬪の所生、のちの景宗）の地位を脅かす老論の金春沢らは除去すべきであるという内容の疏を上げ、それが当時老論側に立っていた肅宗を震怒させ、7日間18次にわたる刑問の末、47歳で命を落としてしまった⁵⁵。李潜は「凶人」のレッテルを貼られ、その連座を恐れた星湖

⁴⁹ 『星湖全集』巻67・先考司憲府大司憲府君行状

⁵⁰ 星湖は李夏鎮の後夫人の安東権氏の所生である。

⁵¹ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「先生既早孤、且清羸多疾、權太夫人常身佩藥囊而餌之、由是未嘗就傳受書」

⁵² 『星湖全集』巻65・金執義鶴皋子墓碑銘「幼有奇才、八歳已能成五字詩。余年長數歳、猶未知讀書、每見之懷慙也」

⁵³ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「然生有異質、穎悟絶人、稍長從仲兄剡溪公學、則自奮刻意讀書。羣居講業、衆皆喧笑嬉戯、而獨默坐手卷、終日不輟。太夫人窺見喜曰、是兒不待課督而嗜學如此、吾無憂矣。既而博覽羣書、強記前言往行、又善屬文、作詩多驚人語、同學諸人皆自以爲莫及焉」

⁵⁴ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「乙酉朝家設增廣科、先生以策發解、因試所録名違式、不赴會試」

⁵⁵ 韓祐勅『星湖李瀾研究』、ソウル大学校出版部、1980、11～12頁；송혁기「剡溪李潜の丙戌年上疏研究」、『民族文化研究』60、2013、94～96頁。李潜の上疏は『剡溪先生遺稿』に全文が載っており、『肅宗実録』・『承政院日記』・『燃藜室記述』などには縮約されたものが載っている。

一門は、一時身を隠すことを余儀なくされた⁵⁶。この出来事は星湖のそれ以降の生涯に大きな影響を及ぼすことになる。科挙の放棄と道学への精進がそれである。すなわち、当時は甲戌換局（1694：肅宗20）により南人が政治の舞台から完全に排除されて10年余が経った時点であり、そうした状況で起きた李潜事件は、星湖の立身出世を不可能に近いものにしてしまったのである⁵⁷。星湖は科挙をあきらめ、「杜門畏影」⁵⁸、三兄の李澈（1662～1723）及び従兄の李瀾（1654～1706）の指導のもと、道学に邁進する道を選んだ。その時の勉学の様子を「家状」はつぎのように伝えている。

太夫人の昏定晨省以外は、部屋に危坐して、聖經賢伝及び宋の程朱の書や我国の退溪の文を取り、丁寧に読み、深く考え、繰り返し参看・考証したため、概してその叡智が照らし、その精神が及ぶところは、いくら深奥なことでも現せないものはなく、いくら隠微なことでも解けないものはなかった。たとえ一字一義のあやまりでも、はっきりと辨識しないものはなかった。研究の精密で敏捷なところからすれば、先儒の中で及ぶ者は稀であった⁵⁹。

星湖が学者として大成することができたのは、天性の学者的資質に加え、生活に困らない程度の相続田荘や、父の李夏鎮が中国から購入してきた数千巻の古書⁶⁰、そして優れた学者でもあった兄たちから良質の教育を受けることができたためということができよう。星湖の兄の李潜と李澈は、当時嶺南を代表する学者であった李玄逸（1627～1704）が交友を願っていたほど⁶¹、学行をもって士林の間に名望を得ていた。仲兄の李潜は早くから文名を馳せ、弱冠で文科初試に合格したが、「少年登科一不幸」と父の李夏鎮に反対され、会試に就かなかった経緯があり⁶²、三兄の李澈は字をよくし、「玉洞体」あるいは「東国真体」の創始者として知られる。李澈の書法は以降、尹斗緒（1668～1715）→尹淳（1680～1741）→李匡師（1705～1777）へと伝わり、18世紀朝鮮書道の主脈を形成したといわれる⁶³。特に李澈は死後、諸門人から「弘道先生」

⁵⁶ 『星湖全集』巻53・李司成旌閭記「昔在丙戌、我剡溪公之葬鮮也、親朋操文哭者相繼。……既虞祔、余西遁海上、咸送我於山之下、相顧爲之惻然」；『星湖全集』巻55・樞上舍遺稿跋「吾友樞上舍某、幼從我仲氏講大小學及楚屈平離騷。後吾兄弟遭罹世患、禍不測、當是時親戚朋舊舊手諱避、某能宛轉詭隨於刀山劒樹之間」

⁵⁷ 實際李潜事件は、以降の星湖家門の政界進出の障害となった。星湖の息子の李孟休と従孫の李家煥の仕宦の際も、李潜との血縁関係が問題となった（신항수「星湖李瀾家門の学問」、『星湖学報』4、2007、54頁）。

⁵⁸ 『星湖全集』巻24・答安百順戊辰「及棄舉業、杜門畏影、作辛苦生活」

⁵⁹ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「朝夕定省之外、危坐一室、即取聖經賢傳及有宋程朱之書及我國退溪之文、俯讀仰思、反覆參考、蓋其明叡所照、精神所存、無奧不透、無微不釋。雖一字之訛、一義之舛、無不明辨詳議。用功精敏、前儒罕及」

⁶⁰ 星湖の父李夏鎮は1678年（肅宗4）、進香正使として清へ使行しているが、その際、清帝からもらった饋賜銀段で古書数千巻を購入してきた。星湖はその書籍を自身の学問研究の糧にしていると明かしたことがある（『星湖全集』巻67・先考司憲府大司憲府君行状「及將還、例有饋賜銀段、乃舉以買古書數千巻以歸」；『星湖全集』巻9・答息山李先生甲辰「只奔走於應俗求名、中罹禍難、隕穫失圖、便無意於學業文字、則其勢將杜門跼伏、日與世齟齬、家有藏書數千、以時繙閱、爲消遣之資」）。

⁶¹ 『葛庵集』巻11・答樞天章 庚午「李君潛聞是佳士、而未曾接一日之款。又聞其弟名澈者、不事場屋、有志尙風致、固嘗願交而不可得」

⁶² 『星湖全集』巻67・先考司憲府大司憲府君行状「每持盛滿之戒、公子潛弱冠有聲譽中解額、公曰少年登科一不幸、命不就會試」

⁶³ 안대희「弘道先生遺稿解題」、『近畿実学淵源諸賢集』一、大東文化研究院、2002

という私諡を贈られた⁶⁴。

星湖は学問に励む傍ら、自らも直接農事に携わっていたようである。「昔科場で失敗してから、退いて農事を業とした⁶⁵」、「わたしは自ら星湖の荘で田を耕した⁶⁶」、「わたしもまた星湖の野であれこれと田を耕して久しい⁶⁷」などとあるのがそれである。星湖の土農合一の考え方は、以上のような半農半学の経験から生み出されたものであろう。星湖はいう。

天は士農工商の四民を生んだが、士と農は帰を同じくする。農は鉄で耕し、士は筆で耕して、相助けることがないように思えるが、士があるいは時を得ず、貧賤に陥れば、農でなければ将に生きるすべがない。それゆえ必ず農を頼みとするのである⁶⁸。

なお、星湖の経世論書『藿憂録』（「生財」・「均田」など）に見える重農主義的改革案や、『星湖僿説』のいたるところで見かける人民への温かい眼差しも、同じくこの半農半学の経験に裏打ちされたものであろうことはいうまでもない。

星湖は平素、奇矯な行動や名利を追うことがまったくなく、ひたすら修身と実践に務め、自らを厳しく律し、家は正道を以っておさめた。また人に接しては礼儀があり、郷党での身の処し方は道理にかなっていたため、士林の誰もが皆推重するところとなった⁶⁹。こうした学徳によって名声が広がり、1718年（肅宗44）頃からは遠近を問わず多くの士人が教えを求めて集まり始め、次第に学派としての体裁をなしつつあったと考えられる⁷⁰。李秉休の証言によれば、星湖は門人各々の才能に合わせて教えを施したといい、そのため始めは各々の会得の度合いに差があったが、皆次第に努力が実を結び、学問が成就する効果があったという⁷¹。

星湖は47歳（1727：英祖3）の時、名声を聞いた朝廷から繕工監假監役を授けられるが、その官に就かず、終身星湖荘を離れず学問の道を突き進んだ。実践はますます純一なものとなり、造詣もさらに深まった。経伝を探究討論し、著した文章が家中に満ちた⁷²。

それでは星湖の日常の姿はどのようなものであったのか。簡略ながら「家状」にもとづいてその家行を整理すればつぎのとおりである。

星湖は孝心が非常に厚く、1715年（肅宗41）、母の権太夫人の喪に服した際は、三年間、疏

⁶⁴ 『弘道先生遺稿』序「及卒諸門人集議、私諡曰弘道」；『星湖全集』巻68・三兄玉洞先生家伝「癸卯三月十二日考終、壽六十二、諸門人集議、私諡弘道先生」

⁶⁵ 『星湖全集』巻23・答慎耳老 辛酉「在昔瀾不得於科場、退而業農」

⁶⁶ 『星湖全集』巻49・郷居要覽序「余躬耕於星湖之荘」

⁶⁷ 『星湖全集』巻53・二耕窩記「余亦雜耕於星湖之野久矣」

⁶⁸ 『星湖全集』巻53・二耕窩記「天生四民、士與農同歸。農以鐵耕、士以筆耕、疑若不相周、然士或不得於時、貧且賤、不農將無以爲生、故必於此依止」

⁶⁹ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「平居絶無矯異之行近名之事、惟以自修力踐爲務、律已既嚴、刑家以正。接人有禮、處鄉有道、士林之間、已翕然推重焉」

⁷⁰ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「乙未遭太夫人喪、毀容叶禮、三年之内、只食疏飯苦鹽、不近滋味、縗經未嘗去身也。服闋遠近從學之士漸衆」

⁷¹ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「先生爲之各隨其才而施教、是以居門下者、雖其所得之淺深不同、而莫不有蛾述之效」

⁷² 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「今上丁未、朝廷聞先生名、除繕工監假監役。先生爲一謝恩命至京、則監吏告無謝恩例、當投刺於本監提調。先生曰今來只爲謝恩。既無仕進之意則何投刺爲也、即日棄歸。因而終老於星湖荘、踐履益純、造詣益深、討論經傳、著書滿家」

飯に苦塩だけを口にし、縊経を脱がなかったという⁷³。また幼くして亡くした先考の顔や風貌を知らないことを至極無念に思い、話が先考に及べば、晩年に至っても悲しみに暮れて涙を流し、嗚咽するほどであった⁷⁴。

星湖の両親への思いは、祖先や親族への心遣いにもつながっていた。星湖は毎日早朝必ず家廟に拝謁し⁷⁵、遠代の墓にはすべて祭田を置き⁷⁶、幼くして死んだ姉、子息のない庶母や乳母、そして高祖の側室に至るまで、皆祭祀が途絶えないように気を配った⁷⁷。なお、遠い宗族に対しても、飢えた者があれば救恤し、病気の者があれば医者に診せ、死んだ者があれば必ず賻儀を贈った⁷⁸。婚期を逸した者には自らが婚主となり婚具を援助して⁷⁹、倫常が廃されないようにした。

家を治めるにあたっては儉約で節制があった。星湖は嘗て「入儉説」（『星湖全集』巻41の雜著）を撰して、世に蔓延する奢侈と浮華の風潮を風刺したことがある⁸⁰。星湖は凶年になると、豆粥と豆醬と黄卷菹（豆油で和えた白菜の浅漬け）を用意し、よく族人と夜を明かして歓談を楽しんだが、その集まりを三豆会と称した。また半菽歌（『星湖全集』巻5）を作り、自ら楽しんだ⁸¹。まさに安貧楽道の生そのものである。先に述べた星湖の親族に対する経済的支援も、以上のような儉約の実践によって可能であったであろうことは想像に難くない。星湖は生前、自らの身後の礼を定めておいたが、大斂布と柩衣は用いず、衾と銘旌以外は、また紙を使うようにと頼んでいる⁸²。李秉休はこれについて「浮華と文飾を略し、根本と実質を敷く」、孔子から朱子へとつながる礼の精神を深得した結果であると評している⁸³。

だが、星湖の晩年は寂しく苦しいものであった。不幸にも星湖と息子の李孟休（1713～1751）には大小の疾病が絶えず、その治療のために家財を蕩尽した。星湖の献身的な看病にもかかわらず、1751年（英祖27）仲夏、文科に状元で合格し、将来を囑望されていた一人息子の

⁷³ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「三年之内、只食疏飯苦鹽、不近滋味、縊經未嘗去身也」

⁷⁴ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「先生孝友根於性。生纔二歲、大憲公不諱、常以不識先考面爲至慟。……雖在衰老之後、語及大憲公及太夫人、未嘗不慟然垂淚、咽不成聲」

⁷⁵ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「毎日晨興盥漱、整齊冠服、謁于家廟」

⁷⁶ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「又十一世祖以下高祖以上墓皆不遠、而近代有墓田者外、多不能祭……於是方便鳩財、各置墓田、令每歲十月上丁、逐位行事焉」

⁷⁷ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「其次則姊有殤死者、忌祭墓祭、未嘗或闕。又其次則庶母有無後而外孫奉祀者墓祭時或不來、則亦令分饌祭之。又高祖側室墓歲久崩頽不可識、增築封塋、訪其墓田而託宗人、俾不絕香火。又乳母有死而無子者、築壇屋側而祭之、因令歲一奠后、此蓋孝思之所推而旁及遍逮者也」

⁷⁸ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「其飢餓者必探其急而饋之、其疾病者必診問之、其死葬者必賻弔之、不計家之窘絕、不卹身之勤勞也」

⁷⁹ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「其貧弊孤弱婚嫁失時者、或主其婚、或助其具」

⁸⁰ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「其治家儉而有制、世業甚薄、而就其中自有規模。……食取充肚、而禁其奢、衣取掩身而禁其華、祭取芳潔而不要其豐。又朝夕饌羞有定數。自奉既約、待人亦然、不以貴客而有加、不以卑賤而降。又無故未嘗殺雞犬、其佗苟可以已者無所費、故雖無別般調度、而歲計粗足。時或有贏而周窮、終無不給而干人。嘗撰入儉説、諷世之好羞閭節」

⁸¹ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「每謂救飢莫過於豆、歲荒則必煮豆爲粥、以賠其乏。嘗設豆粥一杆豆醬一柸黃卷菹一盃、與族人終夕驩譚、名曰三豆會。又作半菽歌以自娛」

⁸² 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「其記身後定禮則不用大斂布、不用柩衣。繡用稿索、窆用葛菴。又衾旌之外、亦多以紙爲之」

⁸³ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「凡此訓辭、不知者或疑其過儉難行、然此習俗之見也。……朱子之作家禮也、曰略浮文數本實、竊附於從先進之意。彼豈知先生之訓、深得孔朱之心也哉」

李孟休が死んだ⁸⁴。星湖も持病の瘰癧の症状がますます重くなっていった⁸⁵。そのうえ、世の中は凶年が続き飢饉に見舞われ、その惨状は見るに忍びないものであった⁸⁶。こうした艱難辛苦の末、星湖は1763年（英祖39）12月17日、83歳を一期として永眠した。永眠の直前に朝廷から老人に対する恩典として僉知中枢府事を授けられるが、すでに無用の長物であった⁸⁷。

2 星湖の学問的成果

2.1 星湖学の特徴

李秉休は、星湖学の意義を「その心は朱子を学ぶところにあり、その目標は聖人となることを希求するところにある⁸⁸」と総括し、その目標を成し遂げるために星湖自身が採用した学習法については、基本的に「朱子の『集注』によって六経の本旨に遡った⁸⁹」が、それに止まらず、「六経と子・史以外に、たとえ小編や漫録といえども採用すべきものがあれば、必ず得てそれを読んだ⁹⁰」と記録した。また尹東奎は、星湖の学習過程について「先賢の定めた課程にしたがい、まず先に経書を読み、つづいて史記や諸子百家を読んだ。いずれも究めないところがなかった⁹¹」とし、「経書を読むにあたっては、字句ごとにその意味を探究し、また思索を重ねた。要するに、深く研究して自身の力で会得することを目標においた⁹²」と評した。

以上のように、経書の理解に際して「ひろく学び、詳しく奥義を説いて、会得したところをすぐに記録し⁹³」たのが星湖の研究成果、すなわち星湖の膨大な著述である。星湖学の最終目標は「学朱期孔⁹⁴」にあるが、経書や朱子書以外にも広く学び、それを経書の理解に活用していたことがわかる。このような一連の研究行動が、最終的には真理の根源である経書の本旨を正確に理解し、儒学ないし朱子学の両方面である修己と治人における課題に答えるためであったことはいうまでもない⁹⁵。星湖学の道程あるいは全体像については、許伝がそれをよく整理

⁸⁴ 『星湖全集』巻31・答金斯文 乙未「瀾貞疾不死、一子亦恒病、憂歎纏繞」；『星湖全集』巻18・答李致和 庚午「瀾衰剝且置、子疾恰過六百有餘日、肚腫遍蝕、腰脊膿流益增、藥餌都廢、拱手待其自瘳」；『星湖全集』巻24・答安百順 辛未「老身夙夜躬護、筋力竭、家産從而蕩盡、藥餌滋味、幾未免都停矣」；『星湖全集』巻67・亡子正郎行録「既出身登仕、内外遊歷……志未遂而病則崇矣、至辛未仲夏卒不起」

⁸⁵ 『星湖全集』巻13・答權台仲 甲子「瀾背瘰癧、殆浹二期、不能愼疾、全歸無望」

⁸⁶ 『星湖全集』巻20・答尹幼章 乙亥；『星湖全集』巻14・答權台仲 丁丑

⁸⁷ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「癸未先生年八十有三、適值國家舉優老例典、陞資授僉知中枢府事。其年十二月十七日、以微疾啓手足於寢室」

⁸⁸ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「其心則學朱而其詣則希聖也」

⁸⁹ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「由集註以溯六經之旨」

⁹⁰ 『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「又先生於書、無所不讀、六經子史之外、雖小編漫録、苟有可採、必得而閱之」

⁹¹ 『星湖全集』附録巻1・行状（尹東奎撰）「循先賢所定課讀、以經書爲先、繼以史記諸子百家、無所不究」

⁹² 『星湖全集』附録巻1・行状（尹東奎撰）「其讀書也、字求其訓、句索其旨、思之又思、要以深究自得爲期」

⁹³ 『星湖全集』附録巻1・行状（尹東奎撰）「博學詳說奧、隨得有録」

⁹⁴ 『星湖全集』附録巻1・行状（尹東奎撰）

⁹⁵ 『星湖全集』附録巻1・墓碣銘（蔡濟恭撰）「若其進學之方、行必以知爲先、故以致知爲力行之本。知之將以行之、故以力行爲致知之實」

している。

慨然として求道の志を持ち、まず先に経伝、そして宋の程朱や我東の退溪の書を繰り返し読んで、深く考え、なおかつ細密に分析し、奥義を探索して、その根本を立てたのちに、天下の群書を遍く閲読して、宇宙間の三才に属する事物に関して、窮めない理がなく、達しない道がなかった。そうしてさらに造詣を深め、独りで会得したところがあり、先人が未だ明らかにしていないところを明らかにしたのである。古の聖人の教えを受け継ぎ、将来の学問の道を切り開いた功は、いちいち数えあげることができない⁹⁶。

すなわち、星湖は経書の中から真知を獲得するために、経伝や程朱書や退溪書の精読・深思に止まらず、それ以外の様々な分野にも関心を寄せ、その博学によって得られた知識をも動員し、経書の理解に努めたということである。こうした研鑽の結果、星湖の「才覚は万物にあまねく及び、知識は古今に通達し、六経の奥義から百家の異説に至るまで深く研究し、精密に選別して、はっきりと胸中に納めておく⁹⁷」ことができ、なお、修己の方面だけでなく、経世すなわち「当世の現実問題においても関心が及ばないところがなかった⁹⁸」のである。その学問の「範囲の大きいことでいえば、地が万物を載せ、海が川を包み入れるようであり、分析の緻密なことでは、まるで細かい蚕絲や牛毛のようである⁹⁹」。広くてしかも精密な学問である。なお、星湖の学問は「静存動察、真知力行」、修己と治人の両方に関心を持って研究に励み、そこで得た知識をその両方に実践することを目標にしていた¹⁰⁰。儒学もしくは朱子学の理想を追い求めた学者といつてよいであろう。

もう一度星湖学の性格または内容を整理すれば、星湖は儒学の目標を達成するために、まず、朱子と退溪の研究成果をもっとも重要な参考書にして真理の源である経書の探究に取り組んだ。ただし、星湖の学問は朱子と退溪の研究成果を鵜呑みにするものではなく（不喜依様）、自身にとってどうしても理解できないところに対しては、博学を通して得た様々な分野に関する知識をも動員し、その総合・折衷という手法を用いて、最終的に自得に至る（要以自得）ことであつたといつことができる。

以下では、以上のような星湖学の特徴に留意しながら、星湖の著述を「経学・性理学」、「退溪学」、「経世論・博学」、「礼学・国学・その他」とカテゴライズして、その全体像を鳥瞰したい¹⁰¹。

⁹⁶『星湖全集』附録巻2・諡状（許伝撰）「慨然有求道志、先取經傳及有宋程朱我東退溪書、俯讀仰思、毫分縷析、探賾窺奧、以立其本。然後遍讀天下書、凡於宇宙間三才所屬事物之上、靡有不窮之理、靡有不達之道。深造獨得、發前未發、其所以繼往聖開來學者、不可摟指也」

⁹⁷『星湖全集』附録巻1・行状（尹東奎撰）「才周萬物、識達古今、至於六經之奧義、百家之異說、研窮搜抉、判然胷中」

⁹⁸『星湖全集』附録巻1・行状（尹東奎撰）「亦於當世之務、無所不周」

⁹⁹『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「若語其範圍之大則地載海涵也、語其分數之密則蠶絲牛毛也」

¹⁰⁰『星湖全集』附録巻1・墓碣銘（蔡濟恭撰）「其靜存動察、真知力行、用工之無所偏倚有如是者」

¹⁰¹著述の概要を作成するに際しては、『星湖全集』附録巻1の「家状」・「行状」・「墓碣銘」、附録巻2の「諡状」を基本資料とし、そのほか、各著述の「序」などを参考した。

2.2 星湖の著述

〔経学・性理学〕

星湖の経学・性理学に関する研究成果といえば、まず『星湖疾書』を挙げなければならない。四書・三経を始めとして、『近思録』・『心経』・『小学』・『家礼』と11種類があり、経書と性理学書全般に対する研究書、あるいは朱子学の研究叢書といえることができる。まず、「行状」をもとに、『星湖疾書』の著述動機を復元すればつぎのようになるであろう。

星湖は、世俗の学問が模糊ではっきりせず、前説を踏襲するばかりで得るものがないため、天理を晦まし、人欲に囚われるようになったとし、そのほとんど途絶えた斯学の脈をつなぐためには、程朱以来の為学の心法を復元・継承することが急務であると認識した。程朱以来の為学の心法とは、経書を読んで意味を解釈し、義理を辨別して意志を篤くすること、単純な知識の習得に終わるのではなく、その知識を体得することである。すなわち、経書の知識を現実に適用するための準備段階または前提として、経書の本旨を正確に理解し、それを体験して完全に自分のものにすることである¹⁰²。星湖はその目標を成し遂げる方法として、まず基本的に朱子の『集注』を通じて六経の意味を探究したが、その内容をそのまま踏襲するのではなく、細部にわたって、字句ごとにその意味を探究した。その過程において、朱子説を以てしても解決できない疑問がある場合は、必ず考え、考えて得るものがあれば、すぐさまそれを記録したという。その研究過程の記録がまさに『星湖疾書』である。星湖はこうした研究姿勢こそ、受け継ぐべき朱子の「為学心法」、学問精神と認識したのであり、研鑽の結果、星湖は先儒が未だ明らかにしていないものも多く発明することができた¹⁰³。「疾書」とは張載の「会得したところがあれば、すぐさま記録した（妙契疾書）」から取ったものである¹⁰⁴。

ただし、星湖が『疾書』の中で、自得を重ね、深思して自説を提示しているのは紛れもない事実であるが、基本的に星湖の研究は「朱子の『集注』を通じて六経の本旨を探究」しており、その自説の提示は「朱子説を篤く信じる中で、あるいは解けない疑問がある場合」に限るものであったことも忘れてはならないであろう。

「家状」などは、星湖が『疾書』の中で提示した代表的な自得の成果として、三代の井田について論じたもの（孟子疾書・滕文公上）、河図と洛書、先天と後天について論じたもの（易経疾書）、王風・鄭風について論じたもの（詩経疾書）、中庸10章の主旨について論じたもの（中庸疾書）などを挙げている。

〔退溪学〕

星湖の研究成果としては、退溪李滉関連の著述にも言及しなければならない。星湖が「退溪の学問が独り朱子の道を伝えた」と認識していることからわかるように、星湖の退溪に向けた尊慕の念は朱子へのそれと変わらなかった。その尊慕は「私淑」という言葉通り、学問の継

¹⁰²『星湖全集』附録卷1・行状（尹東奎撰）「蓋讀書解義、辨別篤志、此程朱以來爲學心法。觀於此二序（孟子疾書・論語疾書の序）、亦可見先生之於此學、傳聖賢之心法、而繼斯學之幾絕。亦可以知先生之眷眷切切於憫俗學之含糊鶻突、因循無得、至於晦天理窮人欲也」

¹⁰³『星湖全集』附録卷1・家状（李秉休撰）「先生之學、不喜依樣、要以自得。經文注說之間、有疑必思、思而得之則疾書之、不得則後復思之、必得乃已。故疾書中槩多前儒未發之旨」

¹⁰⁴『星湖全集』附録卷1・家状（李秉休撰）「其曰疾書者、取橫渠畫像贊妙契疾書之義也」

承に止まらず、日常生活の言行にまで及ぶものであった¹⁰⁵。

星湖の退溪への尊慕の念はつぎのような著述を通して顕現された。退溪が「四端七情論辨」において提起した「理気互発説」の正当性を証明するために著した『四七新編』、後学が暗誦して做うことができるように遺集と門人の記録に見える退溪の言行を『近思録』の体例に従って編集した『李子粹語』、そして遺集の中から礼を論じた書簡を選び分け、類別に分類・編集した『李先生礼説』がそれである。この三書について簡略ながらその概要を紹介すればつぎのようである。

まず『四七新編』であるが、朝鮮儒学史上最大の論点である「四端七情論辨」は、退溪李滉と高峰奇大升の論争に始まった。退溪が人間の道德感情の根源を理に求め、四端と七情を理と氣に分属し、「四端理之發、七情氣之發」としたのに対して、高峰は四端と七情はともに情であり、情は理と氣の合であるため、四端と七情を理と氣に分属するのは論理的に正しくないと反論した。退溪は高峰の批判を受け入れ、「四端は理が先に発して氣がそれに随い、七情は氣が先に発して理がそれに乗る（四端理發而氣隨之、七情氣發而理乗之）」と修正するが、その後、栗谷李珥によって再び非難された。栗谷は四端が七情中の「善一辺」であることを再確認した後、「理氣は渾融しているものであって、属性上もともと相離れることができない。心が動いて情になるときは、発するのは氣であり、発するゆえんは理である。氣がなければ発することはできず、理がなければ発するところがない（理氣渾融、元不相離。心動為情也、發之者氣也、所以發者理也。非氣則不能發、非理則無所發）」と反論する。星湖はこのような栗谷の説が、朱子の人心道心説「人心は形氣に生じ、道心は性命にもとづく」や、『朱子語類』の朱子の語「四端はこれ理之發、七情はこれ氣之發」と食い違っている点を憂慮し、この問題を条目ごとに分け、いちいち分析して『四七新編』を著した。なお、晩年に至っては、再び門人らとともに『四七新編』の余意を講求し、蘊奥を究め、内容がさらに備わった¹⁰⁶。星湖は『四七新編』において退溪の「理気互発説」の正当性を主張しているが、しかしその結論は星湖の自得の成果であり、単純な退溪説の墨守ではない。星湖自ら『四七新編』の序で告白しているように、星湖の「四七論辨」に対する本格的な研究は「非常に詳しくて漏れのないように思えるが、回りくどくてわかりにくい」退溪説に対する疑問から始まっており、星湖の最終結論は、『孟子』・『礼記』などをもって参考・対照し、長い間思索を重ねてたどりついたものであった¹⁰⁷。星湖の自

¹⁰⁵『星湖全集』附録卷1・家状（李秉休撰）「其在我東先賢、謂退溪之學、獨傳朱子之道而最盛、尊慕退溪、無異於朱子、其日用踐履之際、做而行之者居多」

¹⁰⁶『星湖全集』附録卷1・家状（李秉休撰）「又如四七理氣之說、見於朱子語類、而中國之人未聞有疑之者。至我東退溪、取其語載於鄭秋巒之雲天命圖、奇高峯始疑之曰四七之分屬理氣者非是、與退溪往復難辨、其說許多、未乃悟其說之非而歸一。其後李栗谷則爲說益浩汗、而大要與高峯之初見無異。於是主退溪者謂栗谷有理氣爲一之病、主栗谷者謂退溪有理氣互發之差、兩相詆議、未有定案。先生謂今之所爭者、皆非朱子之意也、朱子嘗註大禹謨曰道心發於義理、人心發於形氣。又於語類曰四端理之發、七情氣之發、與禹謨註同一語脈、則其言理之發氣之發者、猶曰義理之發、形氣之發云爾。其義本無可疑也、栗谷不察乎此、乃云發者氣也、所以發者理也。此只以方寸間發動之理與氣言、其與語類理發氣發之義、有何交涉耶。又云四端即七情之善一邊、若然則四在七之中、此豈語類四理七氣之本旨耶。遂撰四七新編、發揮晦菴之旨、而羽翼退溪之說。逮其晚年、復與門人講求新編之餘意、窮盡底蘊、尤爲詳備。其說俱在集中、此不煩錄」

¹⁰⁷『四七新編』序「予自夙歲、緝閱紬繹、不得要領、輒意倦而止者非一二。竊嘗謂退溪雖似詳悉、或欠乎直截、則寧舍此從彼、又以有朱夫子之證援、故有所未敢爲。既而曰義理公天下之物、古人自古人、今人自今人、何必同。乃取孟子禮運等本書、參互究極、忽若有契、體之於心、驗之於事、益見意趣。反求之退溪之書、始鑿鑿可徵。始知如海濱波之談、本非初學破的之訣、而重有信於先生之書不宣辭而已矣。余將以此往質於先覺、懼夫思起旋塞、無以爲考證之地、遂成此編」

得重視の研究姿勢は、退溪研究においても一貫していることがわかる。

『李子粹語』は、星湖が日頃退溪の遺集及び『三經積義』・『四書積義』・『啓蒙伝疑』・『理学通録』などを読みながら、道学にかかわる要語に傍点を打って印をつけたのち、それらを抄録して40年間身近において愛読したものである。その後、門人の安鼎福や尹東奎などと話し合い、添削を加え、類目別に編集したものに、退溪の門人らが撰した年譜や李徳弘が撰した『溪山記善録』、そして『言行総録』・『言行拾遺』・『言行実紀』・『言行録』・『言行述』・『行略』などからも選り分け、それらを追加して完成された。朱子とその門人の編纂である『近思録』の体例に従っている。この書物は最初に東国の道を記録したとの意味で『道東録』と命名したが、1753年、完成に伴い『李子粹語』と書名を変えた¹⁰⁸。

そのほか、遺集の中から礼を論じた書翰を選別し、その内容を類別に分類・編集して作った『李先生礼説』がある。この書物が現存するか否かは確認されていないが、現伝する「序」（『星湖全集』巻49・李先生礼説類編序）によれば、星湖は退溪の意見と異なる学者の説もすべて収録したといい、それは実に、退溪の包容の心を継承したものであり、事師にあたって隠すことがあってはならないという教えに従ったものであると明かしている¹⁰⁹。

〔経世論・博学〕

星湖学の特徴の一つは、その研究関心が経学や性理学の分野にとどまらず、博学や経世の分野にも行き届いていることである。経世済民に関する『藿憂録』、絶えることのない知的好奇心の産物である『星湖僊説』がそれである。

『藿憂録』は、星湖が「天下の事は、もし甲がしなければ乙がするものである」として、日頃現実社会の弊害の根源を黙々と探究し、その救済策を常に考えた結果である。星湖は、「（君子は）思うこと其の位より出でず」（周易・艮卦）というが、まさにすべきことをその地位にないという口実で考えない場合があればそうではないと否定し、「其の位に在らざれば、其の政を謀らず」（論語・泰伯）というけれども、平素何も考えずにぼんやりとしていては、のちに政事を任されてもいかなる措置も取ることができないとして、自らの経世論提示の正当性を訴えた。吠畝の中に埋もれている身であったが、政治参加への意志が消えてはいないことが窺える¹¹⁰。書名の「藿憂」は豆の若葉を食べる者、つまり在野の人間の憂いという意味である。

星湖は『藿憂録』の中で、国家が解決すべき喫緊の問題を条目ごとに論述している。総18条目あり、その題目を記せば、「経筵」・「育才」・「立法」・「治民」・「生財」・「国用」・「捍辺」・「兵制」・「学校」・「崇礼」・「式年試」・「治郡」・「入仕」・「貢举」・「錢幣」・「均田」・「朋党論」・「科

¹⁰⁸『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「既取其言行之見於遺集及其門人所記者、編輯如近思錄之例、名曰李子粹語、使後學得而誦法」；『李子粹語』序「瀾生也後、不得爲其徒、徒能讀其書而悅之。竊自以不克該識其遺訓爲大差吝、輒採其要而錄之、名以道東編。爾來四十有餘年、未及刊正、吾友安百順鼎福欲更加添刪、一遵紫陽之近思定例、與朋友共之。是吾望也、然瀾精魂剝盡、自無力可以及此、遂託百順與尹幼章東奎反覆商量而共圖之、書成易其目曰李子粹語云爾」

¹⁰⁹『星湖全集』巻49・李先生礼説類編序「義理者天地間一公物。無古無今、無彼無此、恐不可以人之高下而一切揮斥之也。是以書中各條之下、摭附諸說、而雖與先生說有些異同、皆在收錄。非敢有所輕重、實體先生包容之度、竊附事師無隱之義、若躬承警欬然者、庶幾彷彿乎日在春風座上也。知此意者、必有以恕我矣」

¹¹⁰『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「其於經濟則雖身處吠畝之中、而未嘗不以斯世爲己憂。嘗謂易稱思不出位者、欲其安分守常也、若曰事之當爲者、諉以非位而不思則未然也、聖人戒不在其位不謀其政者、謀是干與也、匹夫而干國政、固爲罪矣、若平日邈然不思則授之以政、將何以處之、觀於孔孟可見。是以自爲學之初、留心世務、凡於國政之弊壞、民事之艱難、默究弊原、咸思揅策、乃撰藿憂録」

拳之弊」である。

つぎは星湖の博覧強記の成果『星湖僊説』であるが、博学はある意味、星湖学全体に絶えずに刺激を与える、いわゆる学問活動の動力であったかもしれない。読経中に起る疑問を解決するためには、博学による知識の拡大は欠かせないことであった。李秉休が「六経と子・史以外に、たとえ小編や漫録といえども採用すべきものがあれば、必ず得てそれを読んだ¹¹¹」と証言しているように、星湖は書物を読み、事に応じる暇に、見聞や思索を通して得た知識があれば、その都度記録した。これらが積まれて巻帙をなし、名付けて『僊説』としたという。その中には、経書に関する文章もあり、歴史に関する文章もあり、音楽に関する文章もあり、象数に関する文章もあり、国家の経綸に関する文章もある。上は天地から下は万物に至るまで、遠くははるかにしえから近くは当代に至るまで、内は中華から外は夷狄に至るまで、包括しないものもなければ、論じないものもない。ほとんどが考究し立証したものであり、助けとなり役に立つものばかりである。漫録というものが生まれて以来、これに比肩すべきものはなかった¹¹²。星湖本人は細々しくてつまらない話（僊説）と謙遜するが、実はただの漫録ではなく、もう一つの「疾書」といえるものである。「天地門」・「万物門」・「人事門」・「経史門」・「詩文門」の五つの門に大きく分類されており、総3000余項目が収録されている。

〔礼学・国学・その他〕

星湖の学問的成果の中では、忘れられがちであるが、礼学も重要である。本稿では立ち入らないが、『家礼疾書』や『李先生礼説』、そして『喪威日録』などの著述をさておいても、ほとんどが学術的討論を目的とする星湖文集に伝わる膨大な量の書簡でも、心や四端七情など性理学関連の内容に並んで、実際喪祭礼や『朱子家礼』の礼説に関する内容が圧倒的に多い。道学者ないし礼学者の姿そのものである。

星湖礼学の基本理念については、星湖自身によるつぎの言葉がそれをよく示しているといえる。

朱子の『家礼』はすなわち帝王の法制であるため、今日の礼を行なう者が必ず従うべきものである。しかし、古今の事情が異なり、貴賤の分が変わったものについては、またそれを変えなければならない¹¹³。

礼学においても星湖学の基本理念が一貫していることがよくわかる。朱子の礼説は標準解釈としての機能を果たしてはいるが、星湖はまた時代の変化に合わせた修正を積極的に認めているのである。現実的かつ合理的な礼学ということが出来る。

星湖の『家礼疾書』は、朱子の『家礼』を基本としたが、根源に遡って『儀礼』にまで及び、

¹¹¹『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「又先生於書、無所不讀、六經子史之外、雖小編漫録、苟有可採、必得而閱之」

¹¹²『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「又於讀書應事之暇、或得於見聞、或得於思索、則輒隨而記之、積案成帙、名曰僊説。其中有經說有史說有樂說有象數之說有經綸之說。上自天地、下至萬物、遠自遼古、近至昭代、內自中華、外至夷狄、無所不該、無所不論、而舉皆有考有徵、有裨有用。蓋有漫録以來無此比也」

¹¹³『星湖全集』附録巻1・家状（李秉休撰）「則常謂朱子家禮、便是一王之制、今之行禮者、所當必遵。然其古今異宜、貴賤殊分者、又不容不變」

さらに『礼記』・『通典』などの書物まであまねく統括・折衷した成果であった。星湖は自身の『家礼疾書』の著述意義をつぎのようにいう。

礼は天理の節文である。天には一つの理があるのみであるが、三代の礼が同じでないのはどうしてであろうか。季節の節序が変わることをもって証明してみれば、四時の氣運が同じでないため、寒ければ裘衣を着、暑ければ葛衣を着る。その生活方式こそ異なるが、その中の理が同じでなかったときがあったのであろうか。理が出逢う状況によって、その生活方式は異ならざるを得ない。それゆえ、礼は時（時宜）というのである。時宜を重視し、これを以って節約すれば、天にもまた背かないことであり、この意味を知る者こそ、礼を語ることができる¹¹⁴。

すなわち、星湖礼学の核心は「時」である。礼は今を生きる者のためにあるものであり、古経や『家礼』に書いてあるままに実践するよりは、礼の根本精神を理解することが第一義であるという意味であろう。

このような認識を持っている星湖にとって、虚栄に満ちている現実は無難なものであった。星湖は世の中の風潮が日に日に虚勢と奢侈に流れ、士友の中に貧賤ながら権貴の真似をし、家計を支えることができなくなった者があることを慨嘆した。そこで古今の機宜を斟酌して冠婚喪祭の規式を作り、一家の礼としてそれを士友と共有しようとした。その記録がまさに『喪威日録』であり、時宜を得た適切な礼の実践の勧めである。以上は、孔子の「贅沢な人は傲慢になりがちで、儉約な人は頑固になりがちだが、傲慢になるよりは、まだしも頑固になる方がよい」（論語・述而）という教えと、朱子の「浮華と文飾を略し、根本と実質を敷く」（家礼・序）という教えを守ったものである¹¹⁵。実際星湖は、生前自らの身後の礼を定め、家族に質素な葬礼を頼んでいる¹¹⁶。

そのほか、博学の延長ともいえるが、星湖の著述にはいわゆる「国学」の研究もある。『海東楽府』・『百諺解』・『観物編』などがそれである。『百諺解』は360首程度の朝鮮のことわざを八言で漢訳したものであり、『観物編』は日常に対する観察と思惟の記録である。

おわりに

朝鮮朝後期を代表する思想家として名高い星湖李瀾（1681～1763）は、退溪李滉の流れを汲む南人の一派、近畿南人をもって自任した。星湖の驪州李氏家門は、宣祖朝から肅宗朝にかけて有力文閣家門として繁栄を極めたが、庚申換局（1680）による南人政権の没落に伴い、凋落の一途を辿り始めた。星湖は10歳頃から仲兄の李潜（1660～1706）に学を受けるが、1706年（肅

¹¹⁴『家礼疾書』序「禮者、天理之節文。天有理一而已矣、而三代之不同禮何也。驗之於時月之代序、四時不同氣、故寒而裘暑而葛、不同其養也、理何嘗不同。理有所值、養不得不異、故曰禮者時也。以時爲大、因以撙節、天亦不違、知此意者、可以言禮矣」

¹¹⁵『星湖全集』附録卷1・行状（尹東奎撰）「又慨風俗日奢、士友間貧賤既甚、而慕效貴勢、莫可支吾。於是參酌古今之宜、撰冠昏喪祭之式、以爲一家之禮、而要與親友共之。蓋出於孔聖與其不孫也寧固及朱夫子略浮文敷本實之遺意、而其規法節目、在喪威日録、可考而法也。此不詳著」

¹¹⁶『星湖全集』附録卷1・家状（李秉休撰）「其記身後定禮則不用大斂布、不用柩衣、繃用稿索、空用葛葬、又衾旌之外、亦多以紙爲之」

宗32)、老論を激しく批判する疏を上げた李潜が肅宗の怒りを買って杖殺されるや、立身出世をあきらめ、三兄の李滌(1662~1723)及び従兄の李滢(1654~1706)に就いて、道学に邁進する道を選んだ。

星湖は経書の学習にあたって、朱子と退溪の研究成果をもっとも重要な指針としてその理解に取り組んだが、それは単なる朱子や退溪説の踏襲ではなく(不喜依様)、自身にとって理解できないところに対しては、博学を通して得た様々な知識をも活用し、その総合・折衷によって、最終的に自得に至る(要以自得)ことであった。

当時のほとんどの学者は、文集一種に自身の学問思想を集注するのが一般的であったが、星湖の場合は58巻に上る文集のほかにも、膨大な量の経書研究を始めとして、6・7種の別著がある。また『星湖僊説』に引用されている書籍の数からもわかるように、星湖の博覧強記は驚くべきものである。

門人の尹東奎が星湖の学問を評して「広くて豊富であり、簡略ながら核心があった¹¹⁷⁾」といい、「才覚は万物にあまねく及び、知識は古今に通達した。六経の奥義から百家の異説に至るまで、深く研究し、精密に選別して、はっきりと胸中に納めておいた。当世の時務についても関心が及ばないところがなかった¹¹⁸⁾」と述べているのも頷くことができる。なお、星湖の高弟の一人である慎後聃(1702~1761)は、星湖の学問を退溪のそれと比較して「退溪は徳(道德)をもってなし、星湖は智(理智)をもってなす¹¹⁹⁾」と評したが、まさに星湖学のもっとも重要な特徴である主知主義的な性格をよく表しているといえよう。

総じていえば、星湖の学問は自得を目標とする緻密な研究姿勢をさておいても、星湖の著述全体を見渡せば明らかなように、経学・性理学・退溪学・経世学・博学・礼学・国学などと、その研究範囲が非常に広い。その点こそ、当代の他の学者と差別化される星湖学の特徴であるにちがいない。星湖のこのような朝鮮儒学史に屈指の朱子学者・性理学者・退溪学者・経世学者・博学者(polymath)としての多重的な面貌は、星湖自身の学問的背景が、決して単純な一直線的なものではないことを強く物語っているといえよう。

次号では引き続き、家系と不可分の関係にある党色に留意しながら分析を行い、伝統的な思考と斬新で自由な発想を併存させたと言われる星湖の学問的背景について考察を試みたい。

¹¹⁷⁾『星湖全集』附録巻1・行状(尹東奎撰)「若夫先生之學則博而瞻、簡而核」

¹¹⁸⁾『星湖全集』附録巻1・行状(尹東奎撰)「才周萬物、識達古今、至於六經之奥義、百家之異說、研窮搜抉、判然胷中、亦於當世之務、無所不周」

¹¹⁹⁾『星湖全集』附録巻1・行状(尹東奎撰)「門人慎後聃嘗有言曰、退翁以德造、先生以智造」

Academic background of Sŏngho Ilk (1)
— Family lineage, lifetime and literary works —

KIM Kwangrae

Sŏngho Ilk 星湖李瀾 (1681-1763), a famous scholar representative of the later Chosŏn dynasty, is considered himself to be a member of Kŭn-gi Nam-in 近畿南人 sect which followed the school of T'oegye IHWang 退溪李滉. Sŏngho's I clan of Yŏju 驪州 greatly prospered as an influential faction from the Sŏnjo 宣祖 period until the Sukrchong 肅宗 period. After the fall of the Nam-in administration due to the Kyŏngsin political changeover 庚申換局 (1680), however, the influence of the clan began to decline. Sŏngho started to learn from his second eldest brother, IJam 李潛 (1660-1706), when he was about ten years old. But in 1706, IJam offended Sukrchong by severely criticizing Noron 老論, and was executed. Sŏngho gave up the examination for government service to follow a Neo-confucian course, learning from his third eldest brother, ISŏ 李澈 (1662-1723) and his cousin IJin 李震 (1654-1706).

In his study of classic Confucian writings, Sŏngho strived to understand the study achievements of ChuHsi 朱熹 and T'oegye as essential principles. Sŏngho did not simply follow their teachings, but for things he couldn't understand, he integrated the wide range of knowledge he had gained through extensive learning, which eventually led to his own understanding.

Most scholars of the day focused their ideologies on a single collection of works. Sŏngho, however, devoted himself, not only to the writings of Confucian classics, but also to the study of other Non-confucian writings. In addition to a collection of works totaling 58 volumes, he also left six or seven other writings. As indicated by the number of references in his writing "SŏnghoSasŏl" 星湖僿說, the range of his learning and memory was amazing.

In summary, as indicated in his entire writings, the range of Sŏngho's study significantly covered a wide range including Confucian classics, Neo-confucianism, T'oegye study, politics and economics, polymathy, liturgy, Korean classical literature, as well as careful study aiming for further understanding. This feature distinguishes Sŏngho from all other scholars of his day. The many faces of Sŏngho identify him as the greatest Confucian classics, Neo-confucian, T'oegye, politics, economics, and polymath scholar in Korean Confucianism history, and bears strong testimony that his scholarship background has never been a simple and single straight line.